

6 カルメンとフラメンコ

カルメン？

フラメンコといえば、カルメン。そんなイメージは今でも根強いようです。

カルメンはスペインにはよくある女性の名前で、カルメン・アマジャをはじめ、カルメン・リナーレス、カルメン・レデスマ…フラメンコのアルティスタにも多いですね。でもここでいうカル

メンは彼女たちの名前ではなく、オペラで有名な『カルメン』です。さてフラメンコとの関係はあるのでしょうか。

物語／小説とオペラ

オペラ『カルメン』は1875年にパリで初演されました。その基になったのはメリメの小説『カルメン』で、

1847年に発表されています。メリメは何度もスペインを旅し、1930年にモンティホ伯爵夫人に聞いた話などをもとに創作したのが小説『カルメン』でした。北スペイン、ナバラ出身の兵士ドン・ホセがセビージャでヒターナに夢中になり、彼女ゆえに山賊に身を落とし、ついには殺すという身の上話を、スペインを訪れた考古学者が聞くという物語で、民族学的考察の要素も含まれます。が、オペラでは恋愛に焦点を当て、セビージャを舞台に異国情緒を強調し、原作が持つ重苦しい暗さとは対照的な華やかさで見せます。男を誘惑し墮落させるファム・ファタル、魔性の女の典型、奔放なカルメンのイメージはオペラからきています。とても人気の演目で、オペラとして観たことがない人も口ずさめるくらい有名な曲がたくさんありますね。

カルメンの時代

オペラ『カルメン』が発表された19世紀後半はスペインで、フラメンコの形が確立しはじめた時代です。その少し前に発表された小説の『カルメン』でも、タンバリンを持って踊ったり、カスタネットを鳴らしたりするカルメンの姿が描かれていますが、フラメンコという言葉は出てきません。ただ、金持ちがジプシー女をよびギター伴奏で“ロマンセ”を踊らせて楽しむ、とっています。一方、スペインの古典舞踊であるエスクエラ・ボレーラは19世紀前半からフランスの劇場の舞台にも上がってきました。スペイン発の音楽舞踊がフランスでも人気を集めていたのです。フランスの人気舞踊家によって踊られ、またスペインから舞踊団もやってきました。彼らの演目の中には今のフラメンコの原型とみられるようなものもあるのです。オペラ『カ



カルメン・アマジャ
 カルメン・アマジャのアメリカでの人気の由来にはその名前もあるのではないのでしょうか。スペインのカルメン、という名前で注意を引かれ、みるとその激示唆に熱狂したのでは？

ルメン』の作曲家ビゼーはスペインに行ったことはありません。でもスペイン的なものを目にしたり耳にしたりする機会はパリにいても十分にあったと思われま

ハバネラとセギディージャ

オペラ『カルメン』について書かれた日本語の解説などを見ると、フラメンコ風のメロディーやリズムを取り入れ、などと書いてあるのが少なくありません。確かに演出としてフラメンコの踊り手が出演することは多いようですし、もとはないフラメンコ曲を加えることもあるようです。ですが、オペラを聴いても私たちの耳に馴染んでいるフラメンコ曲は聞こえてきません。有名な『ハバネラ』はそのタイトル通り、ハバナ風という意味の、キューバ由来の音楽ジャンルです。オペラ『カルメン』で歌われているのは、スペイン人作曲家セバスティアン・イラディエルの曲『エル・アレグリート』を基にしたものです。また、サウラの映画『カルメン』でパコ・デルシアがブレリアのリズムに乗せて演奏していた『セギディージャ』も名前こそシギリージャとよく似ていて、そのせいでフラメンコ曲だと思われることもあるようですが、セギディージャは、広くイベリア半島に広がる歌の形で、フラメンコ曲シギリージャではありません。セビジャーナスの基となったもので、リズムの原型は一緒だと言えるかもしれません。

フラメンコ版カルメン

オペラのヒットにより、無声映画時代から映画に数多くとりあげられ、また1949年にはローラン・ブティ振り付けのバレエも誕生しました。が、フラメンコで取り上げられることはあまりありませんでした。オペラでのカルメンのイメージがそのままスペイン女性のイメージのようにみられることに反感を感じるスペイン人たちも多いのが理由の一つかもしれません。スペインの流行歌で「私はスペインのカルメン、

メリメのじゃない」という歌詞があるくらいです。日本女性を蝶々夫人のイメージでみられることに私たちが抵抗を持つのと一緒かもしれませんね。

もっともオペラ公演に招かれて踊ることはあったようで、1950年代ピラール・ロペス舞踊団時代のアントニオ・ガデスはヴェローナで初めて『カルメン』を踊ったと言います。そのガデスが、1983年カルロス・サウラ監督の映画『カルメン』に主演し、続いて舞台版もパリで初演します。重層構造の映画よりはシンプルですが、稽古着でのレッスン風景がいつの間にか『カルメン』の物語に入っていき構成も含め、名作に違いありません。1992年にはラファエル・アギラルの『カルメン』が日本で初演され、1999年には国立バレエでホセ・アントニオ振付作品がアイダ・ゴメス主演で上演されています。また、2000年にはアントニオ・マルケス、2004年には、ドン・ホセをストーカーとして描いたアントニオ・カナレスとローラ・グレコによる『カルメン、カルメラ』が上演されています。その後も2006年にはアイダ・ゴメス、2009年にはサラ・バラスというように、名だたる踊り手たちがカルメンを手がけてきています。なお、いつ始まったのかわかりませんが、セビージャの、団体客が行くタブラオでは『カルメン』の寸劇は定番です。

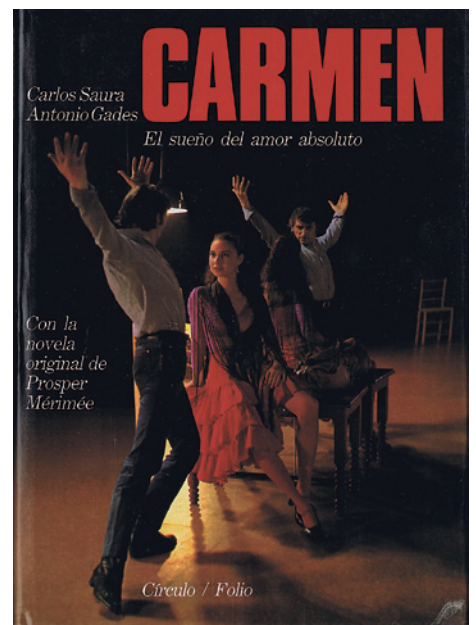
というわけで『カルメン』原作にもオペラにもフラメンコは出てきませんが、フラメンコになる前のスペイン音楽のエッセンスはあり、全く関係がないわけではありません。



91年のしかぜ
カナレスとの日本公演を控えたフアナ・アマジャと。
彼女もサルバドール・タバラ版『カルメン』で主役を踊りました。



フランス人画家ギュスターヴ・ドレの『踊るヒターナ』サウラ監督映画『カルメン』でも使われていたこの絵は1862年スペインを旅した時のスケッチです。オペラ『カルメン』が生まれた時代のものになります。



映画『カルメン』
これは映画の台本や監督のラフスケッチなども収録した本。カルメンという圧倒的に赤い衣装が多いのはなぜでしょうね。情熱の象徴？

志風恭子／1987年よりスペイン在住。
セビージャ大学フラメンコ学博士課程前期終了。パセオ通信員、通訳コーディネーターとして活躍。パコ・デルシアをはじめ、多くのフラメンコ公演に携わる。